

真野法界寺の六斎念仏

〔大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題〕

加藤 賢治

Name :

KATO Kenji

Title :

The Rokusai Nenbutsu of Mano Hokai-ji: An Overview of the role played by Nenbutsu-ko in uniting a community

Summary :

The Rokusai Nenbutsu (chant) practiced in the area of Mano in Otsu, Shiga, is the cornerstone of the Nenbutsu-ko (monthly gathering of devotees of Amitadha) that unites the people of the village of Nakamura. In this paper I will examine this regionally intertwined community, which is a valuable element in modern society; report on its current status; and outline points for further consideration.

はじめに

大津市北部地域の真野地区は、比叡山系から流れ出る真野川を中心とする豊かな農村地域であるが、滋賀県南部の他の地域と同じく、戦後の高度経済成長の流れで、京都、大阪のベッドタウンとして急速に新興住宅が増加してきた地域でもある。そのピークは過ぎたが、特に昭和の終わりから平成にかけては、大型ショッピング店やマンションが次々と立ち並んだ。その真野地区の中で今回取材した旧字の中村地区は、比較的近代化の流れを直接受けず、真野神田神社の氏子として、また、法界寺の檀家として古くから伝わる風習を守り続けている。

中村地区は現在の行政区ではほぼ真野一丁目、二丁目、三丁目にあたり、集落の各戸は、自治会とは別に、中村会という組織に属し、神田神社の祭礼、法界寺の宗教行事、愛宕講、行者講などの年中行事に関わるのである。

その中でも、この地域は、神社の氏子としてよりも、旦那寺である法界寺（浄土宗）との関係が深く、盆行事としての「施餓鬼」や「六斎念仏」などの行事において他の地域に見られぬ特徴がある。

加藤 賢治

特に六齋念仏は、盆行事が行われる八月に開催される。かつては全戸を巻き込んだ年行事として、深いコミュニティを築いてきた。今回は、この調査を通じて、現代における宗教行事のコミュニティ、その重要性和問題点について考えてみたい。

一、真野法界寺と六齋念仏

(ア) 真野法界寺

浄土宗慈光山法界寺（大津市真野三丁目）は、大本山清浄華院の末寺として慶長二年（一五九七）に開創されたと当寺に伝わる。過去帳によると開山は、真野出身の有力者、桂昌院桂林昌公大和尚であるとされている。

真野地域は農地が市街化され、年々都市化が進む中、法界寺では旧来からの檀家約七〇数戸、三名の檀家総代が当寺の運営の中心を担っている。日常的には各檀家の戸主が念仏講を組織し、春秋の彼岸法要や盂蘭盆会法要、十夜法要など主体的に年中行事が行われる。



写真1：毎年8月14日に行われる真野法界寺の六齋念仏（平成26年の8月に筆者が撮影）



そして、それらの行事の中でも中心的なものが「六齋念仏」と呼ばれる念仏踊りである。

(イ) 六齋念仏とは

六齋念仏とは、本来、六齋日（仏教でいう精進の日で毎月八日、十四日、十五日、二三日、二九日、三〇日を指す）に念仏を唱えることをいう。その起こりには諸説があるが、現在伝わるものには空也堂（紫雲山光勝寺極楽院）系と干菜山光福寺系という二つの流れがある。空也堂系にはその起源に関して、平安時代に市聖（いちのひじり）と呼ばれた空也上人（九〇三～九七二）が、松尾明神から鉦（かね）と太鼓を授けられて衆生救済のため念仏踊りをはじめ、民衆に念仏を布教したという伝承がつたわる。一方の干菜山光福寺系では、浄土宗西山派の道空が、十三世紀の半ばに京都烏丸の常行院で民衆に念仏を広めるため歓喜念仏踊りをはじめ、文永二年（一二六五）には龜山天皇から「六齋念仏」の号を賜わった。干菜山光福寺（現在京都市出町柳）は、別名干菜寺とも呼ばれ、寺伝によると豊臣秀吉が鷹狩りの際、当寺を訪れ、当時の住職が秀吉に干菜（大根や蕪の葉を干したものを）を献上したところ大いに喜ばれ、以後干菜山光福寺の名を拝命したという。江戸時代には光福寺は諸国における六齋念仏の総本山といわれ、寛永十四年（一六三七）から浄土宗鎮西派本山知恩院の支配下となった。

本来の六齋念仏は『金光明六齋精進功德経』に基づいて、鉦

と太鼓をならしながら衆生救済を目的としたものであるが、江戸時代には盆踊りと結びつき、江戸後期になると、見世物的な曲芸が行われるなど、芸能化していった。演じられる曲目も、発願、回向歌、弥陀願唱、念仏、結願という純仏教的なものから、能楽や浄瑠璃、歌舞伎から取材した楽曲が演じられるようになった。

京都では、昭和五二年に京都六齋念仏保存団体連合会が発足し、昭和五八年には「京都の六齋念仏」として国重要無形文化財に指定された。現在も十四団体が所属して、芸能の保存と後継者の育成に務めている。

京都の六齋念仏は獅子舞や猿回しなどが登場するなど、宗教的というよりもむしろ非常に芸能的な要素が濃いのが、真野地域に伝わるものは、純粹な仏教行事として寺の檀徒が盆や彼岸の時期に行っている。真野地区は四つの集落（中村、沢、北村、浜）に分かれ、それぞれ、中村の法界寺（浄土宗鎮西派）、沢の浄国寺（浄土宗禅林寺派）、北村の願生寺（浄土宗禅林寺派）、浜の正源寺（浄土真宗本願寺派）と旦那寺が存在する。このうち六齋念仏を行っているのは、法界寺と浄国寺であるが、先述したように六齋念仏の総本山といわれた干菜山光福寺が知恩院を本山とする浄土宗鎮西派であることを思うと、京都からこの地域にはじめて六齋念仏が入ったのは法界寺であると考えるのが自然であるかもしれない。

また、京都をはじめ他地域（福井県若狭地方、和歌山県紀北

の高野山麓から紀ノ川流域、奈良県吉野川流域、奈良盆地、山梨県、大阪府兵庫県旧摂津地域などに六齋念仏が見られる。滋賀県内は朽木古屋、栗原などに見られる)の六齋念仏は、民俗芸能としての色彩が濃く、多くは保存会が組織され、各地で継承されているが、一方で「講」という宗教行事の一環として古くから地域の住民が受け継いでいるものもある。法界寺の六齋念仏は後者のかたちをとる貴重な行事であるといえる。

二、法界寺の六齋念仏

(ア) 組織

真野法界寺の六齋念仏は、真野の旧字である中村集落にある念仏講の講員によつて継承されている。真野中村地区は現在の行政区画でいうと真野二丁目から三丁目までが範囲となるが、新興住宅が大半を占め、全約二〇〇戸のうち、旧集落はおおよそ八〇戸で、この旧集落の住民はほとんどが兼業農家である。そして、氏神(神田神社)や旦那寺(法界寺)、そして山林を共有していることから、「中村会」を組織して、山林の管理や農作業、神仏に関わる行事、愛宕講、行者講、念仏講などの講中の運営を行っている。

念仏講の講員は中村会の構成員(各戸から男性一名以上で現在91名)がほぼそれにあたり、その内で、十五、六名が六齋念仏を継承している。毎年、八月十四日のお盆、八月二三日の地

蔵盆に法界寺と旧集落を舞台として六齋念仏が行われる。

平成一〇年に「真野の六齋念仏」として滋賀県選択無形民俗文化財に指定されている。

(イ) 法界寺の六齋念仏の現状

かつては、小学校高学年から鉦、太鼓を習いはじめたが、少子化もあり現在、子どもたちが練習する風景を見ることは希である。

例年八月六日から法界寺で練習が始まる。

十四日が六齋念仏の本番であり、鉦担当の二名と太鼓を担当する四名の合計六名が一つのチームで、かつては二チームに別れて檀家回りができたそうであるが、現在はベテランのチームを中心に檀家を回り、その他の人々は随行する。

十四日の当日の夕刻十八時、十五、六名の講員が、浴衣姿、団扇持参で法界寺本堂に集合。本堂外陣で太鼓を持つ四人が二人ずつ向かい合い、本堂内陣に向かって左手の太鼓の二人に後ろに鉦の担当の二人が付く。本堂内陣に向かって左奥の鉦の担当者は「トウジャ」と呼ばれて、このチームのリーダーにあたる。本堂内陣前の真中の太鼓担当は「カシラ」あるいは「カタ」と呼ばれる一番太鼓、その向い側が「オオバイ」と呼ばれる二番太鼓、その左手が三番太鼓、その向い側が四番太鼓である(図1参照)。他の講員は、それぞれの後ろに付いて団扇で鉦と太鼓の担当者を扇ぐ。

「トウジャ」の発声により「セイシユシヤノコウミョウハ、ネズルトコロラテラシタマウ……ナンマイダブ、ナンマイダブ」との発願経からはじまり、太鼓と鉦が「ろっこ」「おしわたり」という二種類の節回しを奏で、六斎の讃が唱えられる。六斎念仏は約十五分で終了。

その後、鉦、太鼓の担当が交代し、再び六斎念仏がはじまった。このチームの念仏が終了すると、十九時前、本堂を出て、薄暗くなった観音堂の前で、三チーム目が六斎念仏を奉納した。三度の六斎念仏が終了した十九時過ぎから、法界寺を出て檀家回りがはじまる。六斎念仏の檀家回りは本来、中村地区の法界寺の檀家全ての家を回り、新盆の家では仏間で六斎念仏を行い、それ以外の家では玄関先で略式の念仏を唱えたというが、現在は新盆を迎えた檀家のみを訪ねることになっている。

昭和五〇年代後半頃に、六斎念仏を厚く興隆する方がおられ、子どもたちもたくさん集まって、行列をつくって盛大に檀家回りが行われた時期もあったという。

取材した平成二六年のお盆の檀家回りは七戸を回って終了した。それでも午後九時をまわっていた。

本堂 内陣



図1 真野法界寺の六斎念仏



写真6：第2グループによる六斎念仏 本堂内陣前を少しずらして行く



写真2：江戸期文政年間につくられたという太鼓



写真7：本堂前で第3グループによる六斎念仏 奥が法界寺観音堂



写真3：鉦（かね）



写真8：檀家回り 新盆の家の前



写真4：本堂内陣前で六斎念仏がはじまる



写真9：檀家回り 新盆の家の仏間で六斎念仏

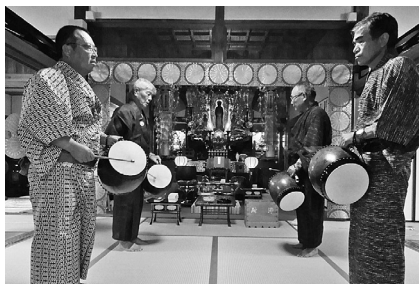


写真5：太鼓の節回しがはじまる 奥の内陣にご本尊の阿弥陀如来立像

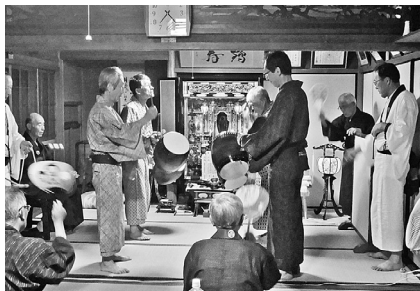


写真12：檀家回り 新盆の家2軒目の仏間にて 第2グループが担当

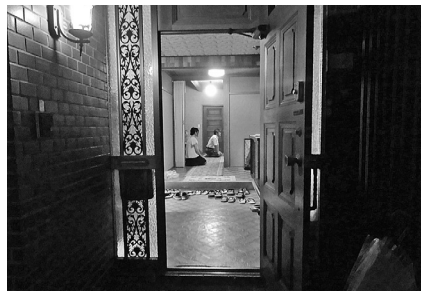


写真10：檀家回り 新盆の家の玄関先



写真11：行列の先頭に行く法界寺の提灯

三、六斎念仏の真野中村における役割と課題

(むすびに変えて)

真野中村地区の中でも、旧集落で組織される中村会は、この六斎念仏を行う念仏講の他にも、伊勢講、愛宕講、汁講など、複数の講が存在し、集落の年中行事として運営している。また、十人衆と呼ばれるいわゆる長老格の集団が存在し、そこに入るための「入供(いりく)」という儀式も残っているという。

この中村集落は、冒頭でも紹介したが、JR堅田駅から山手に一〇分程度歩いたところであり、新興住宅やマンションに隣接しているのである。神や仏の存在が薄れている現代の生活のすぐ隣に、このように深い信仰と自然に包まれて暮らす集落があるということは驚きである。

都市化した現代の暮らしは、社会の新しい仕組みによって集団が分断され孤立化している。隣人に頼らなくとも生活ができるという煩わしさが無い反面、地縁的な横のつながりが希薄で、家族が孤立し、地域教育や福祉問題等も現代社会の弊害として指摘されている。また、災害時などにそのつながりの弱さが露呈し、地縁的なコミュニティの必要性が各地で訴えられているのである。

そういう意味でこの中村会は、非常に深い地縁・血縁的コミュニティを形成しているといえる。年間を通じて定期的に行われる講の行事や、六斎念仏は、神仏を核としながら世代を超えて

地域の人々を繋いでいる理想のコミュニティであると言える。

しかし、少子高齢化という現実を迎えている中村会では、各行事の省略や簡素化も進んでいるようである。実際に難しい節回しの鉦と太鼓を扱う六斎念仏の継承者不足は、大きな地域の悩みとなっている。新興住宅地との交流は深まりつつあるようだが、信仰上の問題や、山林等の共有財産があるため、安易に旧集落の集団に入ることにはできない現実がある。

ただ、六斎念仏の継承については、宗教行事であるとともに無形文化財であるという側面をもっているため、伝統芸能の継承という意味では、広く担い手を募っても良いのではないかと、いう動きもあるようである。

地域の人々が、その地域の自然や業も含めて良さを認識し、今に残された貴重な仕組みを継承して行くことは大変重要である。人口減少社会を控えて、次代を担う子どもたちや若い人たちが、もともと地域に眼を向けるような新たな価値観を見つけ出すことが求められている。

六斎念仏は、中村地区にとって、先人が伝え残してきた貴重な宝であろう。このような古き良き慣習を現代に活かす智慧が必要とされている。

謝辞

今回の調査では、真野中村会の瀬津春夫様、森秀俊様、真野法界寺の安藤隆文住職様、その他、真野中村集落の皆様にも多大なご協力をいただきました。貴重な伝統文化を継承するため、また、地縁的コミュニティを持続するために努力されている皆さんの姿を見聞する貴重な機会をいただきましたことに、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・ 関山和夫『念仏と民間芸能』（白水社 一九八二年）
- ・ 大森恵子『念仏芸能と御霊信仰』（名著出版 一九九二年）
- ・ 加藤賢治「村座と祭礼―滋賀県大津市仰木地区の例―」（近江地方史研究 第四四号 二〇一〇年）
- ・ 加藤賢治「宮座の祭礼―今堅田に伝わる祭礼 野神祭りに見られる現状―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要1号 二〇二二年）
- ・ 加藤賢治「古式祭礼に見るコミュニティとそこに展開するコミュニティケイション―大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心に―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要3号 二〇一四年）
- ・ 大津市史編纂室 新修大津市史第七巻「北部地域」真野

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第5号

発行日 平成28年3月24日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937